



帛紗の縦横についての疑問

廣田, 吉崇

(Citation)

茶の湯文化学会会報, 30:8-9

(Issue Date)

2001-09-10

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90001018>



法が少し異なること、帛紗の三方が縫目、一方がわさになっていることは、多くの流派に共通すると思われるが、一体わさの方が長いのか短いのかどちらなのだろうか。

現在刊行されている点前の教本を調べてみたところ、裏千家では「縦二八センチ、横二七センチで、横は、わさ（輪）」とある（鈴木宗保・宗幹『裏千家茶の湯』主婦の友社、昭和四六年、一七頁。なお、別の裏千家の教本では「約二七センチ×二六センチ」とある。千宗室『新版裏千家茶道のおしえ』日本放送出版協会、昭和五九年、一〇二頁）。他の教本でも縦横の寸法は書いてあるが、わさの位置は不明である。ちなみに表千家では「縦二七センチ、横二八センチ」とある（千宗左『表千家』主婦の友社、昭和四九年、一一八頁）。そこで、北村徳斎帛紗店に尋ねたところ、わさは上、寸法は鯨尺で縦七寸五分、横七寸二分と教えられた。計算すると縦二八センチ、横二七センチになる。表千家も裏千家も同じはずですと言われたので、単に縦横の考え方が異なるだけでも知れない。要するにわさの方が短いという結論になる。

ところが、私が稽古している鎮信流（石州流の一派）の帛紗はわさの方が長いものがあ

帛紗の縦横についての疑問

廣田 吉崇

長年茶道の稽古をしていて今頃気付くのも迂闊な話であるが、帛紗の縦横がわからず困っている。帛紗が正方形ではなく、縦横の寸

る。師匠に尋ねたところ、わさの方が長いものが正しく、その理由は、反物を切つて帛紗を作るのだから、同じ寸法ならば、わさの方を長くすることにより、切り取る丈が短くなり、一つの反物からその分たくさん取れるからとのことであつた。わさの方が短いとなれば、長い裂を切り取り、さらに耳の部分より多く切り落とさなければならぬ。昔の人々の質実な精神を考えれば、なるほどこれは説得力のある理由だと思わざるを得ない。

石州三百ヶ条第一巻八十四に「服紗二ツ有之事」があり、この注釈の現代語訳から関係する部分を引用する（なお、寸法は曲尺）。
覚書「寸法は両耳を切り捨てて一尺五分、縦九寸。これは縫上りの寸法である。右の一方をわな（輪）にして三方に縫目がある。（中略）仕立様は、両方の耳を横にして、横は一尺一尺一寸まで、（中略）縦は折返して八寸七八分から九寸五分までに仕立てるのである。」、清水道竿の注釈「横一尺一寸、また、一尺五分、縦八寸三分、五分まで。（中略）縫いかたは表へ裏から下へ折返して両脇下三方を縫合せるのである。」、自牧の注釈「耳を横にして二つに折返して縫うのである。耳のほうを横で幅一尺五分、大きなのは

一尺一寸にも仕立てるのである。（中略）縦は大きな服紗は九寸五分、あるいは九寸八分にもする。」（松浦祥月「石州流三百箇条集註抄十一」、松親会『鎮信流抄』第二十号、昭和五十一年、三五乃至三七頁）。縦と横の表現が紛らわしく、多少疑問は残るが、これらによれば、わさを上にして両脇下の三方を縫合わせ、わさの方が長いと考えられる。

これは石州流だけのことであろうか、いくつか文献に当たつてみたが、寸法の記述はあつても、わさの位置にはふれていないものがほとんどである。古田織部正殿聞書に「長サ九寸幅八寸五分也。（中略）縫様ハ二ツ折ニシテ折（たる方其儘縫目なし。三方ハ貝の口に合て縫、二ツ折）之端ノ方へ長ミヲシテ九寸ニ仕也。」（『古田織部茶書一』思文閣、昭和五十一年、一二一頁）という記述があり、文意はわかりにくい、わさの方が長いように読めるのではないかと思う。

北村徳斎帛紗店の話や石州三百ヶ条の帛紗の作り方の記述からは、帛紗のわさは上であるとの印象を受ける。しかし、点前の稽古をされた方ならおわかりだと思うが、最初に帛紗を畳むときはわさを縦方向にするので、点前をする立場からは、帛紗のわさは縦である

と感じられる。先日茶道資料館の「茶道入門―茶の湯を楽しもう―」の展示（平成一三年六月一六日から八月二六日まで）を拝見したが、帛紗はわさを右にして飾られてあつた。すなわち、作り手と使い手で帛紗の縦横の感覚が異なることになり、こうしたことから何らかの混同が起つてきているのではないかと推測される。

このことについて、どなたか詳しいことをご存じの方があれば是非ご教示いただきたい。